

# 名戸ヶ谷ビオトープだより

第 58 号 2014 年夏号

<http://nadogaya-biotope.org/>

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会 発行

発行責任者：篠崎 将 Tel/Fax 04-7173-6353

## 田の草取り作業

田植え後の植え直しも終わりましたが、無農薬のため、今年も雑草が繁茂し始めました。6月14日、15日に続き、21日、28日にも会員で田の草取りを行い、ほぼ取りきりました。特に「コナギ」は稲の生育を邪魔するので、休日の早朝にも継続除去しました。また、14日には「カリ肥料」28日には「穂肥の追肥」を田んぼの面積に合わせて計量し、散布しました。



たまごが7個ありました

### カルガモの産卵・抱卵を確認

田の草取りの時、うるち田の木道を歩いていると、下からカルガモが飛び出しました。2週間後、草取り時に木道側に草を投げたら、またカモが飛び出しました。これは？と思い、草を掻き分けて木道下を覗くと、巣があり卵が7個ありました。「やったー」数年ぶりのカルガモ親子遊泳を楽しみに静かに観察していました。台風が来る前日に大丈夫かなと思い、静かに覗きなしたが、姿も殻もありませんでした。無事孵ったのか、蛇にでも吞まれたのかわかりませんが、姿を見ることができず、残念な結果でした。(小笠原 智)



親ガモが抱卵中

## キイロスズメバチの巣を駆除

6月14日作業場軒下のモッコウバラのネットに丸いかたまり（ソフトボールほど）があり、蜂が入り出しています。キイロスズメバチで、作成中の巣は初めて見ました。きれいに造る様子を眺めていましたが、子供たちも近づき危険なので、「スズメバチ用殺虫スプレー」を買い、合羽と網をつけた麦わら帽子をかぶり、退治しました。巣を保管しようと思いましたが、木村さんがプロの退治屋さんを呼んで片付けてしまいました。



キイロスズメバチの巣

## 今年もスズメよけネットを張りました

7月中旬に「もち稲」の穂が出ました。10日ほど遅れて「うるち稲」も出ました。ほぼ例年通りで、順調に生育しています。スズメもこれを逃さずと一杯集まっています。手賀沼沿いの田んぼは「農薬の空中散布」をしているので、安全なビオトープに集まってくるのでしょうか。「ごめんなさい」と思いながらもネットを張りました。佐々木さんのお孫さんも手伝ってくれてきれいに張られています。トンボは入ったときは、助けてください。

(小笠原 智)



ハチ退治の用具



ネットを引っ掛けないように運びます



完成です。朝日、夕日で輝きます

# 春の生態調査

## 2014年6月16日(月)実施

朝からくっきりと晴れ上がった天気、気温もぐんと上がり 11 時過ぎには 30 度になっていました。

生きものが活発に動き回る最良の日でした。柄澤氏が欠席となり、篠崎さん、松清さん、影山さん、佐々木さん、そして小生の 5 名が参加。佐々木さんは植物の生態調査に専念で、1 時間半あまり AB ゾーンをくまなく調査し 75 個体を確認して、これまでの生態調査では最高の数となりました。このビオトープの環境保全が皆さんの協力でしっかりと維持管理されている証と言えます。シオカラトンボのオス、メス、アゲハ、キアゲハなどが多く飛び交う日でした。 (藤平三郎)



ラミーカミキリ



ヒメギス



アオモンイトトンボ



キマダラヒカゲ

## 植物の話題二つ

一つ目の話題は「休耕田」です。今年からうるち米の田んぼ二枚を休耕田としました。休耕田になると、どんな植物が生えてくるのか、調べてみることにしました。

たまたま今年から休耕となった戸張の休耕田を覗いてみました。ここでは写真のように小型の水田雑草が生えていました。アゼナ、キカシグサ、ヒナガヤツリなど多彩です。これが普通の休耕田の姿で、このまま放置しておく、やがて日本在来のアシカキ、セリ、ミゾソバに置き換わり、その後はヨシ、ガマなどの大型植物に優占されます。

ところが、ビオトープの休耕田ではふつうの休耕田と違って、小型の水田雑草は見当たらず、見られるのは一面を覆うアシカキとミゾソバの葉です。セリも少し混じっています。ビオトープでは休耕田にも水を張っています。



ビオトープの休耕田



戸張の休耕田

そのため小型の水田雑草が生えにくい環境になっていて、一挙にアシカキなど在来植物が生えてきました。

これから先、ビオトープの休耕田ではどんな植物が入れ替わってゆくのか、追跡したいと思います。

もう一つの話はヒンジガヤツリが発見されたニュースです。場所は木村家跡地にある小さな湿地です。ヒンジガヤツリは千葉県絶滅危惧種に指定されている湿地生のカヤツリグサ科植物です。先端につく小さな花序が「品」の字に似ているためヒンジガヤツリと称されます。大切に護りたいと思います。

(佐々木光正)



ヒンジガヤツリ

# 合同作業日の活動状況

毎月第三土曜日の合同作業日には多くの会員が出て稲作活動、生き物保全活動、植物保全活動に伴う作業や柏市からの委託活動（周辺地の草刈り、ゴミ収集、木道保善等）を行っております。

## 6月21日(土)



今月は13名の会員が参加され、ゴミ収集や市道の草刈り（写真）や木村邸前の草刈り、ザリガニ釣り場の葦の刈り取り作業、植物生息地の葦とミトの刈り取り作業等、各種作業を会員の人達が分担して行いビオトープの環境保全の一役を担っていただきました。

## 7月19日(土)



梅雨の時期は草の伸びが勢いが良く、直ぐに雑草が生い茂ります。今月も13名の会員が参加され、ゴミの収集、木村邸前の雑草の刈り取り作業をはじめ、ザリガニ釣り場の葦の刈り取り作業、木道脇の草の刈り取り作業、植物生息地（Bゾーン）の葦とミトの刈り取り作業、ホタル生息場所の雑草の刈り取り作業等、会員協力のもとビオトープの環境保全に貢献しております。

## 8月16日(土)



どんよりした曇り空の中、今日は6名の参加者でした。市道の草刈り、Aゾーンの雑草の除去、Bゾーンのつるの刈り取り、ゴミの収集など人数は少なかったが効率よく作業が出来ました。

合同作業日は毎月第三土曜日 AM9:00 から実施で、実施作業の他に会員相互の情報交換や親睦の意味もありますので出来るだけ多くの参加をお待ちしております。（藺田廣満）

## ウシガエル よもやま話



私は横浜の郊外に生まれ育ったので、夏の夜、夕涼みに出るとウシガエルの声が出て、少々気味の悪かった思い出がある一方、日本に古来から住んでいるカエルだと思い込んでいた。しかし今調べてみると、ウシガエルは日本名牛蛙だが、英名 North American bullfrog で、レッキとしたアメリカ産である。

生まれ故郷は北アメリカ大陸の、ロッキー山脈より東側の地域である。そんなウシガエルが、どうして日本の池や水田に沢山住んでいるのかというと、事の起こりは1918年

まで遡る。ウシガエルが日本に持ち込まれた理由は、食べられるという理由だった。蛋白源として環境の変化に強く、養殖が容易であることから輸入したのである。日本では「食用ガエル」という別名もここから来ている。実際に食べた方の話を聞くと、ウシガエルの足の肉は淡白で、鶏肉に似て美味しいという。その後、日本各地で養殖が行なわれたが、輸入動物の御約束どうり逃げ出して、日本各地の沼や池で野生化した。

その後、日本の食生活も豊かになり、牛肉や豚肉が容易に入手できるようになり、彼らを食べることはなくなってしまったのである。現在では北海道から石垣島まで、日本全土の湖や池で見ることが出来る。また、ウシガエルの体の構造が高等動物に近いので、僅かではあるが医学的な研究に用いられたり、虫を食べるので害虫駆除にも使われてきた。ウシガエルは日本に生息するカエルでは最も大きく、大きいものでは20cm以上、500gに達している。体色は主に茶色や緑色をしているが、濃色のスポットや網目模様のあるものもある。体色は環境によって大きく変わるのが特徴である。この色の変化は、温度が密接に関係しており、気温が低いときは黒色になって、太陽熱を吸収している。目の後には大きな丸い輪があるが、これは鼓膜で、音をここで捕えている。雄雌の区別は、この鼓膜の大きさでわかり、オスは目より鼓膜が大きく、メスは小さい。また繁殖期になると、オスの喉は鮮やかな黄色になるので、見分けることが出来る。オスは繁殖期である5～8月になると、大きな声で鳴きメスを交尾に誘う。ウシガエルの声は非常に低周波のため遠くまで届き、静かなところでは1km位先まで聞こえるそうです。交尾の仕方は体外受精で、雌は水の中に6000から、多いときは20,000個ものゼラチン状の卵を水中に産み落とす。受精後4～5日で、卵からオタマジャクシが出てくる。その後オタマジャクシは2～3年かかって、大人のカエルに成長する。ウシガエルは寒さに弱く、冬になると大人のカエルは、土の中や水中で動かないでいるが、オタマジャクシは氷の下でも泳ぎ回っている。オスのウシガエルは、縄張りを持つことで知られており、一匹当たりの縄張りは、3m四方くらいである。そこに別のオスがはいってくると、お互いに前足で掴み合い、レスリングのように格闘する。(篠崎 将)

### 名戸ヶ谷ビオトープに来てみませんか？

交通：柏市東口より東武バス（1番乗り場）「名戸ヶ谷行き終点（名戸ヶ谷病院前）下車すぐ

面積：約4,400㎡ 湿性生物：57種 生きもの：161種（内、千葉県指定保護生物26種）

（2013年、年間を通じて観察した生きものの種類）